



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	目的指向の日本語授業のカリキュラム開発 - ニュース番組制作プロジェクトの試み -
Author(s)	金城, 尚美
Citation	言語文化研究紀要 : Scipsimus(4): 93-111
Issue Date	1995-08
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2707
Rights	

目的指向の日本語授業のカリキュラム開発 —ニュース番組制作プロジェクトの試み—

金城 尚 美

1. はじめに

日本語の聴解教材としてテレビ、ラジオのニュースが盛んに利用されている。その基本的な到達目標は、ニュースに関わる語彙を増やし理解できるようになることと同時に、必要な情報を聞き取る技能を養うこと等、聴解スキルの習得であろう。このような技能の到達目標である聴解スキルを伸ばすための練習は、言語能力の基礎的な部分の練習活動である。

さらに、ある目標言語をより効果的に習得するためには、学習者が主体性を持つ能動的な活動を取り入れることも必要である。能動的な活動により、得られた知識を運用させる言語の産出過程を通して、理解項目が運用項目へと移行していく学習がより促進され得るものと予測される。

また予備教育課程の日本語では、その最終目的として、専門の講義が受けられること、専門的な話題についてのディスカッションができること、意見が述べられることといった日本語力を養成することがあげられる。従って「読む・書く・聞く・話す」の四技能が有機的に結び付いた総合的な活動が必要である。例えば、一つのまとまった話しを聞いて書き取るなどの複合的なスキルの養成である。

そこで琉球大学のニュースの聴解力の養成を目標とした日本語の中級クラスにおいて、ニュース番組を制作するというプロジェクトを最終的な目的としたコースを実施し、多くの学習者から肯定的な評価を得た。特定の目的及び成果を目指す過程で言語学習が行われれば、授業は、学習を作り出すことを意図した一連の作業過程として捉えることができる。本稿では、ニュース番組制作を目標としたクラスの理論的背景、実施概要、クラス運営、学習者の反応などについて述べ、ニュース番組制作による日本語教育の可能性を考察する。

2. 理論的背景

教育という営みの中では、学習者の学習意欲や学習動機を高めることは、重要な課題である。Rivers and Temperley (1985) は、外国語としての英語教育の立場から学習者が自然に言語を使用する場を設け、学習目標言語を使って何かをしたいといった内発的動機づけのためには、パターン・プラクティスやドリルなどの型にはまった言語活動を離れた教室活動が必要であると述べている。それについて具体例を挙げているが、その中で、学習者が生来持ち合わせている才能を使う機会を積極的に作り出すべきだとして、テレビのコマーシャルの制作やニュース番組の制作などを提案している。

またRichard-Amato (1993) は、教室における第二言語学習において、いかにして意味のある交渉の機会を学習者に提供するかという観点から、相互交渉アプローチを提案している。その具体的な教授および学習活動として、語り、ロール・プレイ、ドラマ等を挙げている。これらの活動は、学習者を創造的にし、しばらくは自分以外の人になれることを可能にするために、学習者の興味を引く活動であると述べている。今回試みたニュース番組制作プロジェクトに携わった学習者は、ニュースを作るという創造的な活動により、情報を受信する側から発信する立場でタスクを遂行することになる。そしてニュース番組の中でのキャスター役、レポーター役、インタビュアー役などの役割を学習者が各々、普段とは違う自分として演じる。このような新奇性が学習者の興味を喚起し、学習意欲を高めることができると考えられる。

さらに島岡(1986)は、英語教育の立場から、読む・書く・話す・聞くの四技能を個々にばらばらではなく、統合的・有機的に教育を行ったほうが各技能が向上するという考えに基づき、英語のストーリー作成を取り入れた授業の実験を行い、その教育的効果を吟味した。その結果、外国語の学習は、①既成の教科書を通して学習するだけでなく、学習者自身の行動体験を基にしてストーリー作成の作業等を加えたほうが、英語力を身につけやすいこと、②外国語学習は知識の集積よりも伝達行為を実際に体験させるほうが身につくこと、③学習者が既に母国語を通して習得した言語能力を拡張・発展させたほうが、全く別な言語体系として英語を学習させるよりも効果があること、④正規の授業を

行う中で学習者が直接参加する言語活動を加えるほうが、外国語学習意欲は高まること、の4点を検証した。ニュース番組制作プロジェクトも、島岡の行ったストーリー作成と軌を一にした活動として、同様な教育的効果が期待できると思われる。

近年、日本語教育でプロジェクトワークは、総合的なコミュニケーション能力を養成するという活動として注目され、盛んに授業に取り入れられている。その実施結果として、プロジェクトワークが学習成果を高め、また学習者の動機づけを高めるという教育効果があることが報告されている（倉八，1993）。その理由として倉八（1993）は、プロジェクトワークの三つの特徴を挙げている。第1に、プロジェクトワークの過程では、学習者自身の自己関与性が高い活動であること、第2に共同作業を進めて行く過程で他の学習者から学べるのが、学習を効率的にすること、第3に作業の結果として一つの作品を仕上げることにより、大きな達成感を学習者に与えることである。ニュース番組制作プロジェクトは、一つの作品を作り上げるという過程が重視される活動であるという点で、プロジェクトワークと同様、学習者に及ぼす情意面へのプラスの効果は大きいと推察される。

一般に、設定された課題の達成に向けて言語の練習活動が行われる。その練習活動をここでは、広い意味でのタスクと呼ぶこととする。ニュース番組制作という明確な活動目標を設定することにより、その課題の達成に向けて平素の授業の言語の練習活動が行われる。従って、目標に向けての学習のステップである各タスクが意味を持ち、学習全体に対する動機づけが高まると考えられる。このように授業設計という観点から、大規模タスクを目標とした目的指向のコース設定は、有効であると言える。言い換えると、大規模タスク達成のための小規模タスクが必然的に設定され、コースがデザインされる。従って、学習者は、明確な行動目標に向かい、目的意識を持って練習を行うため、学習効果がより高まると予想される。

以上述べてきたように、「ニュース番組制作」を課題目標とした目的指向のコースを設定することにより、次のような学習者の動機または学習意欲が高まると予測された。

- (1) 明確な目標へ向けての言語練習の意味付けから発生する動機
- (2) 作品を作り、完成させるという目的達成意識から生まれる動機
- (3) 学習者相互の協力によって形成される動機
- (4) 新しい経験をするという新鮮さから生まれる動機
- (5) ビデオを使った番組作りという新奇性によって生まれる動機

3. 実施概要

3-1 時間数および学習者

琉球大学教養部で提供されている1993年度の中級レベルの日本語Ⅲ（前期4月～9月）、日本語Ⅳ（後期10月～2月）のクラスで、年間を通してニュースを教材とした授業を行った。教科書は、市販の『ニュースで学ぶ日本語』を使用した。そのコースの終了時の最終目標として、ニュース番組制作プロジェクト（以下、ニュース・プロジェクト）を実施した。授業は、週2コマ（1コマ90分）で、1学期15週である。前期のまとめとしては、アンケート調査によるプロジェクトワークを実施（金城，1994）し、後期のニュース・プロジェクトは、導入、準備、撮影、編集、発表までの段階を、コース後半の約4週間をかけて行った。

学習者は、前期と後期で学生が抜けたり、新規学生が入ったりなど、多少の入れ換えがあったため全く同じメンバーではなかった。ニュース・プロジェクト実施時の学習者の数は16人であったが、その国別内訳を表1に示す。

表1 学習者の国別内訳 (人)

台湾	韓国	中国	シンガポール	タイ	フィリピン	アメリカ	ボリビア
5	1	4	1	1	2	1	1

3-2 カリキュラムデザイン

通常の授業では、基礎的な日本語力養成のために、ニュースの聞き取り学習や語彙の積み上げといった基本的な学習活動を行った。その上で、ニュース番組制作という最終的な大規模タスクに向けた小規模タスクを意識的に活動とし

て取り入れ、練習を積み重ねていった。第1に、ニュースのスク립トを作成する力を養成するために、学んだ語彙を使用したニュース文の作文をさせた。このクラスでは、学習した課の語彙について、その次の時間にクイズを実施したが、そのクイズ問題の1つとして語彙をつないで文を完成させる練習を行った。そして採点后、誤りの多かった箇所などについては、フィードバックを行ったり、さらに練習問題をさせたりした。第2に、発表力を養成するために、関心のある新聞やテレビのニュースについて簡単にまとめて毎回一人ずつクラスで発表をさせ、学生同士、質疑応答を行わせたり、トピックに関するディスカッションをさせた。さらに聞く側に発表内容を5W1Hの情報の形式でシートにメモをさせ、ディスカッション後に意見や感想を書かせ、提出してもらった。

授業流れは時間によって多少異なるが、主に、既習課のクイズ、前回のクイズのフィードバック、学生によるニュースの発表、ニュースの聴解練習、という流れで行った。

3-3 ニュース・プロジェクトの手順

ニュース番組は、全て映像で構成されるのではなく、ニュース番組を発表する段階では、ニュース・ショーの形で、ライブ部分と映像部分で構成した。総合司会役のキャスターをたて、録画映像をみながら番組を進行させていくという形式である。従って映像部分は、各地からのレポートのような形にした。ニュース・プロジェクトは、次のような流れで実施した。

(1) 導入：ニュース番組の制作の手順説明

番組内容の方針の決定およびグループ分け

(2) コマーシャルの制作：グループごとに番組に挿入するコマーシャルの作成。テレビで放映されている実際のコマーシャルの映像にアフレコをして制作。そのためのスク립ト作成および吹き込み作業

(3) ニュースのスク립ト作成：各学習者ごとにニュースを一つ書く。

書いた原稿を教師が添削。発音指導。

(4) 撮影：アナウンサー、レポーター、インタビュアー、インタビューさ

れる人等、各役割を分担。その役割に沿って撮影。題材によっては、屋外撮影。授業以外の時間も使用した。

- (5) 編集作業：授業時間外（講師担当）
- (6) キャスター練習：男女一人ずつ。ビデオ編集ができあがった時点で、学生自身に番組進行の台本を書かせ、教師はアドバイスをするとどまった。台本が完成した時点で口頭練習。
- (7) 発表：映像とライブ出演のコンビネーションで番組を進めた。2人のキャスターの他に、コメンテーターとレポーター役をライブで一人ずつ登場させた。

3-4 ニュース番組の内容

学生達の話し合いの結果、今回制作したニュース番組の内容は、30年後の日本でのニュース番組という設定にし「ニュース2024」というタイトルで番組作りを進めた。実際に起こった日本のニュースをパロディー化したり、30年後の未来には、こんなことが起こっている、こんな物が発明されているだろう、またある人は、将来こんな地位についているだろうという発想の基でニュースを考えることとした。

学生が考え出したニュースのトピックと内容は、以下の通りである。

- (1) 日本で初めての女性の総理大臣誕生
日本語講師の一人が、30年後に女性初の首相になったというニュース。協力してもらった日本語講師には、内容はふせておき、日本の政治などについての意見を聞きたいという主旨で簡単なインタビューを申し込み、ビデオ撮りをしておいて、使用した。
- (2) 世界仲良し基金による世界海中道路の建設の開始
世界が道路で結ばれるという壮大な計画が実施されるというニュース。工事が始められるという岬がみえる場所でのレポート。屋外撮影。また、道路の設計士へのインタビュー場面もまじえた。

(3) 空飛ぶ車、飛行自動車の完成！ 試乗に成功！

空を飛ぶ自動車が完成し、試乗に成功したというニュース。ビデオ映画から自動車が空を飛んでいる映像を探し、編集段階で挿入し、臨場感を出した。

(4) 水燃料で走る自動車の発明！

水を燃料とした車の発明に関するニュース。その車の発明者にインタビューをするという設定。仕事と家庭を両立させている有名な発明家としての役をある日本語講師に依頼し協力を得た。しかしこれも発明家の役であるということはふせておき、実生活で、仕事と家庭を両立させている女性へのインタビューとして、答えてもらった。

(5) 皇太子様の御子息、ひろのぶ様のご結婚相手決定か？！

その年にご成婚なさった皇太子様のご結婚の際の映像を流し、そのご息子の結婚相手が決まりそうだというニュース。あまりにも騒ぎすぎた日本人たちへの皮肉がこめられた内容。

(6) 世界最高齢者、金さん、銀さん、131歳の誕生日

これも、日本中が騒いだ金さん、銀さんに関する話題。長生きし、世界最高齢になった2人の健康の秘訣などについてのレポート。

(7) 最新、美容事情・・・太っているほうがもてる！！

ダイエット・ブームの世相を逆手にとって、30年後は太めのほうがもてるという内容のニュース。

(8) 米の輸出入が全世界で完全自由化

この年にもめた米の輸出入に関するニュース。30年後の時代には、米の輸出入が完全に自由化されているという発想のニュース。スーパーの米売り場で主婦にインタビューする場面も交えた内容。主婦役も学生。

3-4 ニュース番組の構成

ニュース番組を一つのニュース・ショーの形で発表したのが、ショーのプログラムの流れを以下に示す。

総合司会挨拶 [ライブ]

- ① ショーの開始（キャスター挨拶） [ライブ]

- ② ニュース1：日本で初めて女性の総理大臣
 - ②-1：アナウンサーのレポート [録画映像]
 - ②-2：首相へのインタビュー場面 [録画映像]
 - ②-3：キャスターのコメント [ライブ]

- ③ ニュース2：世界海中道路の建設が始まる
 - ③-1：アナウンサーのレポート [録画映像]
 - ③-2：海中道路設計者へのインタビュー [録画映像]
 - ③-3：工事が始められる岬近くからのレポート [録画映像]
 - ③-4：キャスターのコメント [ライブ]

- ④ ニュース3：空飛ぶ車、飛行自動車の完成！！
 - ④-1：アナウンサーのレポート [録画映像]
 - ④-2：車が着陸する場面の映像 [録画映像]
 - ④-3：キャスターのコメント [ライブ]

- ⑤ コマーシャル1：自動車／胃薬 [アフレコした映像]

- ⑥ ニュース4：水を燃料にした自動車が完成
 - ⑥-1：ゲスト・コメンテーターの登場 [ライブ]
 - ⑥-2：アナウンサーのレポート [録画映像]
 - ⑥-3：車の発明者へのインタビュー [録画映像]
 - ⑥-4：コメンテーターの話し [ライブ]

⑦ ニュース 5 : 皇太子様の御子息のご結婚相手が、決定か?!

- ⑦-1 : アナウンサーのレポート [録画映像]
- ⑦-2 : 皇太子様御成婚の際の資料映像 [録画映像]
- ⑦-3 : キャスターのコメント [ライブ]

⑧ ニュース 6 : 金さん、銀さん、134歳の誕生日

- ⑧-1 : アナウンサーのレポート [録画映像]
- ⑧-2 : 金さん、銀さんの資料映像 [録画映像]
- ⑧-3 : キャスターのコメント [ライブ]

⑨ コマーシャル 2 :

環境保護/ビール/食器洗い用洗剤 [アフレコした映像]

⑩ ニュース 7 : 最新美容事情 : 太っているほうがもてる!

- ⑩-1 : アナウンサーのレポート [録画映像]
- ⑩-2 : 太めの美人の資料映像 [録画映像]
- ⑩-3 : キャスターのコメント [ライブ]

⑪ ニュース 8 : 米の輸出入が全世界完全自由化

- ⑪-1 : アナウンサーのレポート [録画映像]
- ⑪-2 : スーパーでの主婦へのインタビュー [録画映像]
- ⑪-3 : 各国の米の人気度ランキング [録画映像]
- ⑪-4 : キャスターのコメント [ライブ]

⑫ 緊急ニュース : 赤ちゃん誕生 (ある日本語講師)

- ⑫-1. レポーターによる報告 [ライブ]
- ⑫-2. キャスターのコメント [ライブ]

⑬ ショーの終了 : キャスターの挨拶 [ライブ]

⑭ エンディングのビデオ映像：NG場面〔録画映像〕

総合司会挨拶（発表会終了）〔ライブ〕

3-5 発表会会場の設定

ニュース・ショーの発表会は、L1教室で行った。中央の大きなスクリーンを画面にし、前横にキャスター席を設置した。大まかな見取り図は、次の通りである。

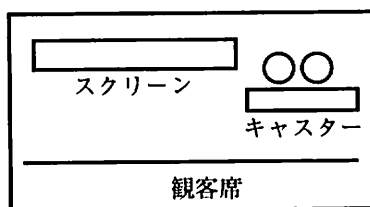


図1 ニュース発表の会場配置

4. ニュース・プロジェクトに関する評価

4-1 学習者からの評価

ニュース・プロジェクト実施後、学習者に本プログラムを評価してもらった。アンケート（表2）において、ニュース・プロジェクトをやってみて、「大変楽しかった・楽しかった」と回答した学生が9名中8名であった。また、ニュース・プロジェクトが学習のまとめの活動として意義のあるものであったかどうかの質問に対しても、「大変良かった・良かった」と答えた学習者が8名であった（表3）。さらに日本語の学習方法としての評価も、「大変効果的」という学生が3人、「効果的」だと思っている学生が5人、「まあまあ効果的」が1人（表4）で、ニュース・プロジェクトの良かった点としても「楽しい学習方法である」（8人）が挙げられている。この結果から、ニュース・プロジェクトという活動が、ほとんどの学習者に受け入れられ、支持されたと言える。

ニュース・プロジェクトの良かった点として「学んだ知識が使える」（8人）と、運用面が評価されており、プロジェクトの意図が反映された結果と言える。またニュース・プロジェクトは、「自分の悪い点に気づくいいきっかけになっ

た」と評価した学生（表5）もあり、発音ばかりでなく、活動の過程で学習者が自分をメタ認知していたことがうかがえる。

自分達の作品に対して「こんなにうまくできたのに、驚いた」というコメントが得られた。さらに、「みんなが協力したので、よい作品ができたと思う」と述べた学生もあり、ニュース・プロジェクトが学習者相互の協力というインターアクションを生み、よい結果につながったことが現れている。

反省点として、「もっと話す練習が必要だったと思う。声が小さい人もいた。また「スクリプトはある程度暗記すべきだと思う」というコメントが出ており、発音の重要性に対する自覚が現れている。学習者同士の発音の聞きやすさを評価してもらった結果（表6）、「大変聞き取りやすかった」と評定した学生はおらず、むしろ聞き取りにくい方向への評定となっている。これは、「ニュース2024」を視聴してもらった客観的な立場の観客側からのアンケート調査でも、「言葉が聞き取れない部分があった」という感想がみられたことから、発音や声の大きさ、話し方の点で練習が充分でなかったと言える。またニュース・プロジェクトの良かった点の一つとして、「発音を直すいい機会であった」（7人）という点が挙げられ、自分の発音に対する認識が深まっている。このことから、このようなチャンスを生かして、今後の指導において発音や読みの練習量を多くしなければならず、よりきめ細かな指導が必要であることがわかった。

ニュース・プロジェクトに関するマイナス評価としては、撮影に時間がとられてしまったことが挙げられていた（2人）。学校外での撮影や、授業時間内でおさめきれなかった場合にはやむを得ず、放課後の時間があてられたが、それが負担に感じられたのであろう。このような特別なプログラムを実施する際には、いつも時間が問題になるが、できる限り授業時間内で作業が終えられるような配慮も必要である。

今回、機材の扱いの問題や時間的な制約の問題などがあり、ビデオの編集自体は教師が担当した。しかし、「編集も学生が担当した方が、良いと思う。先生の負担が大きすぎるし、完成した作品に対しても、もっと愛着がわくのではないか」と述べた学生もいた。今後は、学習者の主体性をさらに広げるためにも、ビデオの編集作業部分も学習者に責任を持たせた方がよいように思われる。

資料1：学習者に対するアンケートに結果(回答者数：9人)

表2：感想

大変楽しかった	5人
楽しかった	3
まあまあ楽しかった	1
あまり楽しくなかった	0

表3：学習のまとめの活動としての評価

大変良かった	6人
良かった	2
まあまあ良かった	1
あまり良くなかった	0

表4：学習方法としての評価

大変効果的	3人
効果的	5
まあまあ効果的	1
あまり効果的ではない	0

表5：良かった点
(複数回答)

楽しい学習法である	8人
学んだ知識が使える	8
発音を直すいい機会	7
みんなで何かを作る	7
自分の悪い点に気づく	5

表6：発音の明瞭性

大変聞きやすかった	0人
聞きやすかった	5
まあまあ聞きやすかった	3
聞きとりにくかった	1

表7：ニュースの内容

大変面白かった	4人
面白かった	3
まあまあ面白かった	2
あまり面白くなかった	0

表8：もう一度やってみたいか

はい	6人
いいえ	0

4-2 視聴者からの評価

今回のニュース番組を「ニュース・ショー」の形で発表をした。その発表会には、他の日本語クラスの外国人学生、日本語担当講師、日本人学生、他科目講師に視聴者として参加してもらい、貴重な感想や意見を得た。

視聴後のアンケート結果を見ると、内容が面白く（表9）、楽しめたショーであったことがわかる（表10）。また、客観的に見た印象からも、ニュース・プロジェクトが外国語の学習方法として、「大変よい」または「よい」という回答が多く（表11）、肯定的な評価を得た。

日本語講師と他科目講師からの感想として、以下のようなコメントがあった。

- (1) 言語活動の学習としてよい。日本のニュースやいろいろな情報に対する学習者の関心の持ち方が変わってくるのではないか。話し方への注意も喚起されるだろう。学習したことが成果として形になることは、成就感があってよい。
- (2) ニュースに対する関心が高められてよい。
- (3) このようなビデオを使った立体的な日本語教育が行われているということは、すばらしい。キャスターは特にすばらしかった。
- (4) 外国語の学習は、目標がはっきりしていれば母国語に近い存在に感じられて学習意欲が高まるだろう。

一方、マイナス面の評価として、「言葉が聞き取りにくい部分があった」というコメントがあった。これも前述の学習者自身の反省からも、出てきた点と一致している。

資料2：視聴者に対するアンケート結果（回答者数：29名）

表9 感想

大変楽しかった	26人
楽しかった	3
まあまあ	0
あまり	0

表10 ニュースの内容

大変面白かった	18人
面白かった	11
まあまあ	0
あまり	0

表11 外国語の学習方法
としての評価

大変よい	20人
よい	7
まあまあ	2
あまり	0

また、日本人学生からは、以下のような好意的な感想を得た。

- (1) 教科書からだけでなく、このようなマスコミを通じた勉強も必要だと思った。
- (2) 最近の日本の事情を反映していてすばらしかった。表現方法やジョークを交えた話しがとても楽しかった。自分でも思いつかないような楽しいニュース内容であった。
- (3) 表現が上手で、言葉使いが自分よりうまいと思った。
- (4) こんなに楽しく外国語が学べるのは、大変すばらしいと思った。

文法ばかりを中心にした授業よりも学生が興味を持って学習できるので良いと思った。日本語の勉強ばかりでなく、日本事情なども学べるし、自分もやってみたいと思った。今度生まれ変わって大学に入学できるのなら、留学生として入学したいと思った。

- (5) 留学生が日本のニュースをどのように見ているのかがよく現れていて、面白いと思った。日本のニュースの特徴をよく捉えていた。

以上のように、今回の発表によって一つの異文化接触の場面を生み、日本人学生が持つ外国人学生に対する見方や意識に何らかの変化を与えたようである。また外国語学習は、文法や語彙を教科書を中心に学ぶものといったような、固定的な学習観にも、多かれ少なかれ影響を与えたようであり、今回のようニュース・プロジェクトが印象的に受け取られている。

その他、「街角インタビューなども取り入れてはどうか」、「コマーシャルの映像も、手作りにしたほうがいいのではないか」という意見もあり、今後の課題として考慮すべき点が指摘された。

5. 反省および考察

ニュース番組の発表会は、2人のキャスターの学生の息がぴったりと合って、期待以上に大変うまく、ショー全体を盛り上げてくれた。これは、今回のニュース・ショーが成功した非常に大きな要因であろう。

日本人学生や他のクラスの学生の前でプレゼンテーションの機会を持ったことで、発音の重要性が再認識されている点で、学習者にとってその後の学習の方向性が一つできたと考えられる。発音を矯正するのは難しい。正しく直すという事よりも、むしろ、学習者に不快感を与えずに直していく方法について、指導する側は難点を感じる。普段の授業の中では、目にあまる発音はその場で直して多少練習のチャンスを与える。しかし、学習者の発話意欲をそがぬように、また授業の流れが発音練習で頻繁に止められてしまわないようにといったような教育的配慮からも、許容範囲であれば少々おかしくても、厳密には直さないというのが実情である。教師の側でも、発音の重要性が強調できる機会が

あれば指導もしやすい。このような人前でのプレゼンテーションの機会をできる限り利用すれば、発音指導のよい場が作れると言える。

また、ニュースの映像の言葉が聞き取りにくいという点は、学習者側の要因の他に、ビデオ撮影の際の技術的な面も大きく関わっている。感度のよい指向性のあるマイクを使うなど、工夫が必要である。特に屋外撮影の際は、気を付けるべき点である。

アンケートで、このようなプロジェクトをもう一度やってみたいかという問いに対して、回答した学生が全員「やってみたい」と答えてくれた(表8)ことから、ニュース・プロジェクトが、日本語の活動として支持されたことを示している。

どの国でもニュース番組の構成等には、類似点が数多くみられ、またアナウンサーのタイプや話し方など、あるパターンが存在しており、模倣しやすい。そういった点で、学習者にとっては、ニュース番組は、身近で馴染みのある題材ではないと考えられる。

学習者が日本で見聞きした社会現象やニュース等の情報を、ニュース番組制作を通して自分達なりに解釈したり、また皮肉ったり等、再構成し表現できたことは、日本事情の学習という点でも有効であったのではないかと考えられる。また外国人の目に日本の社会がどのように写っているのか、日本で起こった現象がどのように受け止められているのかが反映されるため、普段の授業だけでは得られない情報が得られ、指導者としても大変勉強になった。

今回のニュース番組制作という活動を試みて、学習者や視聴者のアンケートや意見の反応から、プロジェクトを実施した目的がある程度、達成できたと言えよう。ある活動をコース目標として明確に設定することにより学習者の学習意欲や動機が高められること、また目標を達成することにより学習者に達成感や成就感が与えられ、教育的効果がより高められることが、今回のニュース番組制作プロジェクトによって明らかになった。

授業設計をしていく指導者の立場から、文法項目や語彙項目などの言語の要素部分や、聴解スキルの習得などの技能の養成などの項目別、技能別の学習目標ばかりでなく、ニュース番組制作のような言語の運用面の活動の目的を立て

ることは、重要である。大目標に到達する過程として、下位目標が必然的にたてられ、コースデザインが行われていくからである。このような学んだ事を道具として使えるような運用面での活動についての目標設定が授業設計者である立場の指導者にとっても、大変重要な意味を持つ。

ニュース番組といっても、いろいろなプログラム構成や内容が考えられる。今後も学習者を主体として、様々な形でニュース・プロジェクトを実施していきたいと考えている。今後、よりよいプロジェクト実施に向けて、カリキュラムの開発、実施方法の吟味を行い、また学習者と教育効果との関連に関する実証的な研究も進めていくことが今後の課題である。

引用および参考文献

- 金城尚美・西郡仁朗（1990）「ニューメディアを利用した結晶化シラバス：写真雑誌とニュースショー・プロジェクト」『国際協力事業団 沖縄国際センター紀要』第2号 49-77
- 金城尚美（1994）「四技能を統合した日本語教授法 —プロジェクトワーク—」『言語文化研究紀要 SCRIPSIMUS』第3号 琉球大学教養部 53-86
- 倉八順子（1993）「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果 —一般化のための探索的調査—」『日本語教育』第80号 日本語教育学会 49-61
- P. A. Richard-Amato（1993）「語り、ロール・プレイ、ドラマ」渡辺時夫ほか訳『英語教育のスタイル』研究社出版 152-163
- 島岡丘（1986）「統合的外国語教授法の実験とその評価」
- J. Dennis共著『統合的英語教授法』大修館書店 33-134
- W. M. Rivers and M. S. Temperley（1985）「型を離れた言語活動」天満美智子訳『英語教育実践ハンドブック上』桐原書店 55-73

Summary

Teaching Japanese for a Goal-Oriented Course: a Trial of Making News Video Program

KINJO, Naomi

It is a common practice for foreign language education to use news as a teaching material. The field of teaching Japanese as a foreign language, also, has employed news as a material for listening comprehension. Consequently, the learning goal of the news comprehension has been set only to improve the learners' listening skills. However, this goal setting is not sufficient; further improvement of language ability requires a goal which has communicative competence in its perspective. Meanwhile, the practical goal for a language course is to determine a course design and to provide more significance of learning tasks in each class. If the goal is clear, the learners themselves confirm their motivation for learning.

Considering the above points, an intermediate Japanese class, whose main purpose was listening comprehension of news, was offered at the University of the Ryukyus during the second semester of 1993. The ultimate purpose of the course was to make video programs for the news. First, the students were required to write some news scripts and to perform as news reporters. Second, the learners presented their own news video programs to students in other classes, Japanese students, and etc., as news show. It took about four weeks to complete the tasks. The later survey says that the learners were very comfortable with this goal-oriented program, and they felt that they completed the tasks successfully.

This paper discusses the design of the goal-oriented course and the result of the learners' and observers' evaluations for the news video program. Then, the whole course, as a trial case, is considered from the view point of language education. Finally, the further possibilities of learning news through making news video program is discussed.